

# 島の民俗信仰について

屋 嘉 宗 克

「玉勝間」の一節に、「詞のみにもあらず、よろづのしわざにも、かたいなかには、いにしへさまの、みやびたることの、のこれるたぐひ多し」と田舎に伝承する言語や風習に、正雅な古代要素を認め、さらに「ことにいなかには、ふるくおもしろことおほし、すべてかゝるたぐいの事をも、国々のようを、海づら山がくれの里々まで、あまねく尋ね聞あつめて、物にもしるしおかまほしきわざなり。」と、海浜山間の村々を訪ね歩いて、記録しておくべきだと述べてあるが、今回のわれわれの学術調査は、沖縄の古い姿を残し民俗学の宝庫と云われている伊平屋島を8日間にわたって探訪、その時の調査記録によつて、種々の民俗で問題となるべき事項は数多くあつたが、ここでは次の諸項について記述することにする。

- (1) 神社信仰
- (2) 豊年祈願
- (3) 悪風返しの獅子(シーサー)
- (4) 野甫島の雨乞祈願
- (5) 無蔵水の伝説における靈魂寄せ(マブイユシ)

## (1) 神社信仰

伊平屋島には、各部落(各字)ごとに神社があり、田名神社(田名区)・前泊神社(前泊区)・大隈神社(我喜屋区)・島尻神社(島尻区)・弁之神社(野甫区)と5つの神社で、城間喜平氏の説明によれば、「1952年(昭和27年)田名神社・1949年(昭和24年)前泊神社・1936年(昭和11年)大隈神社・1940年(昭和15年)島尻神社・1949年(昭和24年)弁之神社と、各字の拝所・火神所の神を統合して合祀して、鉄筋コンクリートの御宮を建て崇拝するようになりそこを任意的に神社と呼ぶようになった。」との事で、古い信仰形態を改めて文明的信仰形態への推移と考えられる。伊平屋島の信仰は昔から宗教の信仰はなく、拝所の神を崇めるといふ御嶽信仰である。島で最も古い部落は、田

名区・我喜屋区・野甫区の3ヶ字で、古代の信仰形態を留めていると考えられるので、主に、田名区の田名神社(図版ⅠⅩのb)・野甫区の弁之神社(図版ⅠⅩのc)を中心として調査をした。

### ◎ 田名神社

ウツカ御嶽の麓にあつて、その右側に約20メートル離れて、御宮の司として「ノロ殿内」(図版ⅤⅢのc)があり聖地とされている。

田名部落は古代においては、大田名村・久里村・ガヂナ村の三つの部落からなり、時代は明らかでないが、久里村は流行病のため住民は死亡し、ガヂナ村は潮害に悩まされて大田名村に移住して、現在の田名区が大田名村となっており、その信仰形態も古く拝所が、ウツカ御嶽・マジヤ御嶽・グスク御嶽・ミサチ御嶽の4カ所で、大田名村・久里村・ガヂナ村にそれぞれ1名づつの祝女神が配置され、その担当も下記のごとくになっていた。

ウツカ御嶽—イヘヤ祝女神—大田名村

マジヤ御嶽—テン祝女神—久里村

グスク御嶽 } アサト祝女神—ガヂナ村

ミサチ御嶽 }

神人としては、イヘヤ祝女神・テン祝女神・アサト祝女神のほかに、17名の女の神々があり、その神の名はハミシ神・ナダシノ神・オーシド神・ユムイ神・ユトイ神・イシド神・ユチ神・ナミノセークラ神・ヒドノトイマシ神・ヒドノシヌイ神・ノダキトイマシ神・トダキトイマシ神・ボタン神・ハラタキノオ神・トダキメークル神・メーノオクラノ神・フダキトイマシ神で、この20名をハンズナと称し、男神は、田名比屋・世主比屋2名である。

女神の使者——サネモ

男神の使者——アサギヌサー

祝女神(3名)——根神 { 女神(17名)—女神の使者(サネモ)  
男神(2名)—男神の使者(アサギヌサー)

祭祀の場合の席順は上記のとおりなのである。

継承について、祝女神はその一族における世襲終身の神職で、各女神は子孫が世襲し、男神は3ヶ年交替の選出神となっている。前述せるごとく、3部落が合併して大田名村(現在の田名区)になつてからは、テン祝女神とアサト祝女神とは継承されず子孫は栄えているが、東ガヂナ原の「石下墓」(図版Ⅳのa)に葬られ部落神として崇拝されている。

「石下墓」は田名区の東方海岸(俗称東ガヂナ原)の洞窟で田名部落の共同墓地で、元農業組合長新垣平徳氏(61才)は、「百年程前からの墓で原始的な

風葬だ」と語っておられた。

1952年（昭和27年）各御嶽の拝所・火神所を廃して、田名神社と称してから全男神・女神は廃止され、ウツカ御嶽の拝所すなわち田名神社は、イヘヤ祝女神によつて祭祀を司っている。

現在のイヘヤ祝女神は第3代目伊礼カマドさん（59才）である。

○ 祝女神は国吉家の血筋で世襲されている。

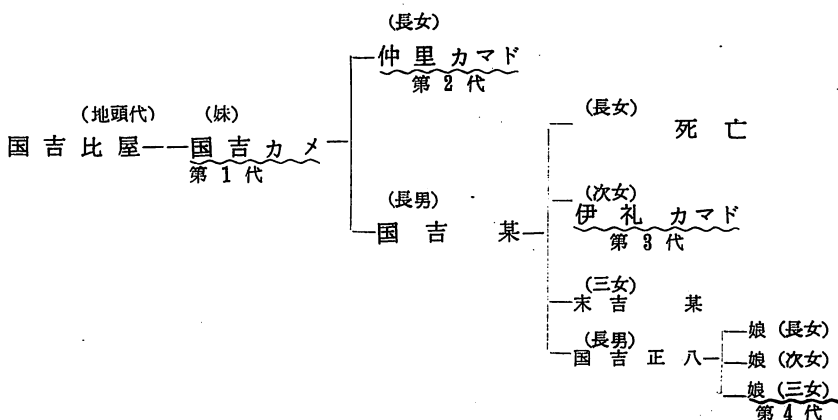
第1代 国吉カメ

第2代 仲里カマド

第3代 伊礼カマド（昭和19年より）

第4代 国吉正八氏の3人の娘より選ぶ

これを系図で示すと、



○死亡した場合は国吉家の血筋をひいた女子から2・3名の候補者を挙げ、部落の主だつた人立合いで「7・5・3のみくじ」によつて後継者を決定する

○継承のしるしとなる曲玉は、第2次大戦において粉無し、衣裳のみが保管されている。

○神社のそばにある「ノロ殿内」は、約5〜6坪の瓦葺で起居出来るように建造されているが、伊礼さんは生活の場は部落内の住宅で営み、朝、晩2回と神行事の場合に御宮の司としての責務を果しているとのことである。

### ◎弁之神社

ヤマヌクワ御嶽（弁之御嶽）の麓にあつて、聖地とされ、拝所はヤマヌクワ御嶽（弁之御嶽）・テルチヤマ御嶽・ウフヤマ御嶽の3ヶ所で、そこを担当する神人は下記のとおりである。

ウフヤマ御嶽 (大山御嶽) ————— 祝女神

テルチャマ御嶽 ————— ウツチ神

ヤマヌクワ御嶽 (弁之御嶽) ————— ニジチ神

根神と称してウツチ神(掟神)・ニジチ神・ユラミチ神の女神・さらに男神として、ノフヌシー (野甫主) ・ノフンチ (野甫掟) ・アマイである。

女神	—	ウツチ神
		ニジチ神
		ユラミチ神

(3名)

祝女神(1名)ー根神ー

男神	—	ノフヌシー
		ノフンチ
		アマイ

(3名)

1949年(昭和24年)12月に、各拝所の神々を合祀し、根神と称する男神・女神を廃して、ウフヤマ御嶽を弁之神社と称するようになって、現在では祝女神1人だけによつて祭祀を司っている。

祝女神は第3代目西銘豊子さん(45才~6才)である。

○伊是名の銘苅家の血筋によつて世襲されている。

第1代 伊 礼 某  
 第2代 泉 ミ ト  
 第3代 西 銘 豊 子

○第3代目の西銘豊さんは、現在那覇に居住しており、神行事のあるたびに帰島して祭祀を司っている。

○継承される曲玉(図版IXのa)は、第二次大戦中も紛失することなく、西銘豊さんによつて保管されている。

伊平屋島における祝女神の配置は歴史が古く、民俗学辞典(P.641)によると「1477年尚真王の中央集権に伴い神道にも改革の手が加えられ組織化されるようになり、王府の辞令によつて神官として公認され発令されるとともに職田・曲玉を拝領して公儀の祝女と称されるようになった。」とあるが、伊平屋、伊是名島は王の発祥地として、尚円王即位以後は、王朝の直轄地で御持島となり尚円王時代(1470年代)に配置されているとのことである。祝女の職田(ヌール地)も地割制によつてわりあてられ、(現在一田名区600坪・野甫区200坪となつている)明治4年(1871年)の廃藩置県によつて沖縄県となり、土地は日本政府の直轄となり、明治32年(1899年)沖縄県土地整理法が公布され、その法令によつて整理を施行し、明治36年(1903年)に土地所有権が認められ、祝女

は社禄として田名200円・野甫100円の国積券を下附されるとともに土地まで所有が認められた。村教育委員末吉常吉氏は「戦前まで俸禄と称して、祝女の職にあるものに、田名区5円・野甫区2円50銭が那覇市の百四十七銀行を通じて交付され、その時の領収書が村役所に保管されている。」と説明された。

## (2) 豊年祈願

旧暦8月11日から15日までに行われる豊年祈願の行事は、沖縄本島各地にも見られるが、こゝ伊平屋島における豊年祈願の行事についての起源は、「年代はよく判明しないけれども往古饑饉が続いて一般農民は意気消沈して、子供の身売りまでに至つたので、時の下治役仲本と云う人は大いに之を慮つて娯楽を与えて増産に活動せしむべく各部落に棒・臼太鼓踊りを挙行し始めた。」(伊平屋村誌P.56)と説明されており豊年の祈願をこめてこの行事が催うされたのである。これを各字別にみると下記のようになつている。

田名区	※獅子舞・臼太鼓踊り
前泊区	棒 踊・琉球舞踊
我喜屋区	棒 踊・琉球舞踊
島尻区	棒 踊・琉球舞踊
野甫区	棒 踊・琉球舞踊

田名区を除いて、前泊・我喜屋・島尻・野甫それぞれの区(字)は、殆んど似通つているが、田名の臼太鼓踊りも、島を離れて沖縄本島に生活する若い人が多くて、伝誦しようとしても伝誦できず年々廃れていく傾向である。

### ※獅子舞について

獅子舞いは、日本内地はもちろん沖縄の祭りや部落行事には欠く事の出来ないものである。「現在の獅子舞は大別して、一人立と二人立の2種に分れ、その分布の状態をみると、信州から箱根の関へ南北にひかれる線を境として、東方は一人立、西方は二人立といふかなり明白なドットマップが描かれる。」といわれ沖縄の場合各地で見られる獅子舞は、二人立がほとんどである。沖縄において獅子舞は、支那から伝来したものか、日本から伝来したものか明らかではないが、支那から琉球に冊封使が渡来した頃多くの文化が支那から伝来した時に輸入されたとも云われるが祥かでない。輸入文化とは考えられるが、これがやがては沖縄本島はじめ八重山その他の島々にも、そして首

里王朝文化の中に、庶民の生活の中に広く、深く入り込み信仰の対象になったと言えるのである。

われわれ調査団は、滞在期間中の「9月13日（旧暦8月15日）」に我喜屋区の豊年祈願の行事に招かれ社会指導主事仲村信宏氏の案内で全調査員見学する機会を得たのである。

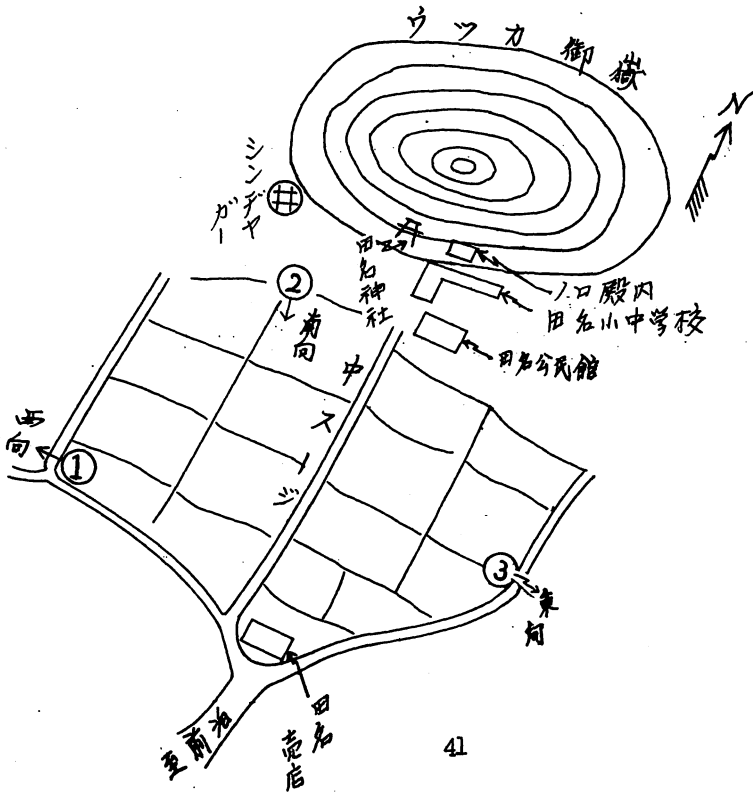
午後7時半、我喜屋区の中央にある公民館前の道路を区民総出で待つ中を、「イリフハ」と称して部落の西の方から東の方へむかつて、錫を持った「※彌勒（みろく）」（図版Ⅴのa）を先頭に長者に扮した人がお供につき、次に舞踊衣裳に身を装うた男女が太鼓や三味線の伴奏で踊りながらにぎやかに登場してくる。そして待つていた人たちも指笛を吹き鳴らしながら手拍子とつて迎える。このパレードがすむと豊年祈願の集団舞踊、扇子踊が中心で活動的な踊りが青年男女によつてくりひろげられ、「彌勒（みろく）」は見ている老人たちの手をとつて一緒に踊ったりしながら、いつたりきたりして愛嬌をふりまくのである。この集団舞踊が終ると爆竹を合図に威勢のいい掛声で、棒を片手に持った青年10名が色彩豊かな鉢巻・袴・脚絆という軽装な出で立ちで登場してくると、この場の雰囲気は最高調に達し、「棒踊り」がエイヤアアの掛声勇しく、爆竹を鳴らしながら2人1組になつての組棒（図版Ⅴのb）が始まり、いろいろと「棒踊り」の妙技を披露して午後9時半頃終る。さらに公民館横の仮設の舞台を中心として、老若男女子供まで全区分集まり御神酒を飲みながら「みろく代」を祈願し、農耕について語り気象について論じ合い、舞台上演じられる数々の舞踊を観賞しつつ、慰安の場ともなるのである。区長は「旧暦8月15日のこの行事は、農耕を午前中で打切つて全区分民が参加するように呼びかけ、豊年の祈願とともに慰安のための行事でもある」と、語つてくれた。

#### ※彌勒（みろく）について

「彌勒（みろく）」とは、菩薩の1つで慈代ともいい釈迦入滅後56億7千万年を経て出現し、衆生を導くという仏である。沖縄では昔から「彌勒」を豊年の象徴として尊び歌にも歌われており、池宮喜輝氏（元無形文化財保護専門委員）は、「この彌勒は豊年の神として、尚真王以前（約400年以前）古くから沖縄の人々に信仰されており、農村における旧暦8月に行なわれる所謂村芝居や豊年祭等に登場してくる。この彌勒は支那から輸入されたものと思われる。」と、説明されている。

### (3) 悪風返しの獅子(シーサー)

田名区の入口3方に獅子(シーサー)の像があつて、区の人々は、「悪風返しの獅子」(アクフウゲシヌシーサー)と称している。沖縄においてはシーサーは「魔除け」の象徴とされて、屋根の上でよく見受けられ装飾というよりも、疫病・悪霊・天災(台風・干バツ)より守るといふ庶民信仰の1つになつており、「悪風返し」は「魔除け」の意に考えられる。一般的に、獅子の姿勢・表情は多少異つており同一ではない。建てられた場所・地理的環境によつて変化があり、それによつて、口を大きく開いたもの・舌を出したもの、目玉をむいてにらんだものと、種々異つている。田名区の獅子①(図版Ⅹのa)は二本の足をそろえた「正座の姿勢」で、口を開き目玉が突出たような表情で、位置は見取図で示すとおり、部落を中心として①西向き・②南向き・③東向きと三方をむいており、北向きだけがない。それはウツカ御嶽の聖地が、北側にあるので、その必要はなかつたのであろう。



田名区に「悪風返しの獅子」(アクフウゲーシヌシーサー)の像が建てられた原因としては、前にも述べたごとく、田名は古く大田名村・久里村・ガヂナ村の三部落から組織されていたが久里村が疫病のために住民が滅亡し、また、ガヂナ村は東海岸に面したところで、天災による潮害をたびたび蒙り生活が出来ず、大田名村に移住して生活を営み、その安住の地が現在の田名区になつている。祖先の人達が、疫病・天災に悩まされた歴史があり、それが故に、「魔除け」の信仰に基いて部落入口3方に、獅子(シーサー)を配したものと考えられる。元村長城間喜平氏の語られたところによれば、「明治の初め頃伊平屋島に、コレラが流行し島尻・我喜屋の部落では死亡者を多く出し、さらに前泊部落まで蔓延し患者が続出したけれども、田名部落は獅子(シーサー)の守護で、コレラの侵入を防ぎ患者が1人も出なかつた。」と言ひ伝えられているとのことであり、旧暦の6月9日以内5日-7日の間の日を、区民がこの獅子(シーサー)を拝むとのことである。

獅子について、口を開いたものが雄・口を閉じたものが雌と一般的に考えられ沖繩での「魔除け」となる獅子(シーサー)は口を開いた雄が多く見受けられる。沖繩各地に見られる獅子の像の中には※狛犬と思われるものもあるが、歴史の上から支那からの影響が大きく、本来獅子を象つたものである。狛犬(高麗犬)だという感覚よりも獅子(唐獅子)という感覚の考察が大きい。

※狛犬(こまいぬ)について

神道における神社信仰においては、厳密には獅子・狛犬と称している。そしてその意は

(1) 「犬」とする説

火闕降命の故事、犬は門を守ること等。

(2) 「鎮子」とする説

簾鎮一御帳台・几帳などの動くのを防ぐためのもの、装飾となること等。

(3) 「魔除」又は「守護」とする説

悪霊や魔物を除き、それから守る等、となつている。

獅子・狛犬は、拝殿・楼門・島居の前面左右その他参道の左右の随所におかれている。



	位置	口	色	角	玉 (又は小獅子)
獅子	左	開く(呵)	黄又は金色	無	無
狛犬	右	閉づ(呷)	白又は銀色	有	有

上記で示すとおり二種の動物を相対せしめたものと云われている。沖縄で戦後作られたものは、獅子か狛犬か、識別することは困難であるが、すべて獅子と考えてよい。この両者の区別は、

獅子—南方系からの伝来と云われており、支那から伝つた「唐獅子」と考えられる。

狛犬—北方系からの伝来と云われており、朝鮮から伝つた「高麗犬」と考えられる。

最近では獅子・狛犬を通して、単に「獅子」とも又は「狛犬」とも云つており、口の開閉によつて陰陽・雌雄の関係を示していると考えられ同一視されている。

#### (4) 野甫島の雨乞祈願

野甫島は古くから水の不自由な島であり、雨乞のさかんな島であつた。地形的にも高い山が伊平屋島に較べてなく平坦な島であり、部落にウフマーガーと称する井戸があつたが塩水が湧出し飲料水に使用できず、1949年(昭和24年)に政府の助成金によつて井戸を掘つたが、塩水が混入しており飲めず、部落の人々は家屋の屋根を利用して、天水を貯えるタンク装置をなし、さらに最近、高等弁務官資金によつて、沖縄本島に見られない大きな貯水タンク(図版VIのa遠景・VIのb近景)が建造されている。このように野甫の部落は雨水に依存している状態であり、盛夏早天の烈しい年には、畑の作物の枯死寸前の窮状に追い込まれ、人々は飲料水にも事欠くという状態がたびたびであつたと思われる。雨乞祈願を調査するために古老を訪ね歩いたが、祈願の歌は伝誦されていないのか、あるいは、もともとなかつたのか採集できなかつた。雨乞祈願は、部落の人が祝女神を中心として集まり、御嶽にて火をどんどん焚きながら祈願し、さらに海岸に行つて海水を浴びながら「水給れ」(ミヂタポーレ)「水給れ」と男も女も口の中で幾度も唱えながら祈願をするのであり、部落全体で行われる共同祈願である。

## (5) 無蔵水の伝説における靈魂(マブイ)寄せ

伊平屋島の西海岸に、伊平屋中学校後方の虎頭岩(トラジュイシ)に似たような大岩石(図版Ⅱのb右端・Ⅱのc近景)があつて、その中腹の所に上部の岩と岩との間から流れ落ちる真水があり、その水がたまるように岩がくぼんでいる。(図版Ⅲのa)この水を「無蔵水」と言い、そしてこの岩石を「無蔵水」と称し、聖地とされている。この「無蔵水」にまつわる伝説について伊平屋村誌を見ると、

### 無蔵水の伝説(後年無蔵水と唱う)

昔田名村に一家を構えた若い夫妻が居て、その夫が或年の夏小舟から田名岬の沖へ釣に出たが、風波のため吹き流され、3年間行方不明となつたので世間の人々は、その夫は溺死したものとしその妻は器量がよく周囲から縁談が申し込まれ親までも再婚をすすめる事になつたが、自分は夫1人で彼が帰るのを待つ計りと周囲や親の意向にも応ぜず、密かに夫が出かけた沖の見える無蔵水の岩の上にある水を便りに、そこで機織をしてカシをかける時、

「里があかえず羽みすすらんともて

今日よかかる日にかしよかけら」

と歌つた様であるが、その後夫は遠い国に漂着し便を見計つて帰るとの音信が伝へて来たので妻は喜び、又遠い国と伝えたので

「しんねくりふねのいきゆるとかいやれば

今日はいち揮で明日やちゆすが」

と歌いかく待つている内に夫は元気で帰り、夫婦相励み家を興し、立身出世をしたとのことであるが、その後の人が彼の妻の貞操を讃え、女子の戒めとして

「大田名のくしに無蔵水のあゆん

夫ふゆるあんぐわあれにあみし」

との歌がある。

と以上のように記されている。われわれが「無蔵水」を調査した時には水は一滴もなく、程遠くないところに夫を待ちつつ生活をしていたという洞窟(図版Ⅲのc)を見た。この洞窟は、東海岸の籠穴(クマヤ)に通じていたと云われる洞窟で、さほど大きい洞窟ではなく西籠屋(イリクマヤ)と称している。元農業組合長新垣平徳氏(61才)によると、幼少の頃は「ンジャ水」(にが水)と言つていたが、40年前に字によつて表出されから「ンゾ水」と美称されるようになったと語られた。「ンジャ水」と言われたのも、その位置が西海岸

の大岩石の中腹にあつて、真水でも風や波によつて海水の飛沫が入りこんでに  
がくなるので、そう言われた理由があると思う。

この伝説は、貞節なる女性の鑑として、また婦女子に対する戒めの内容を持ち  
さらに靈魂寄せ（マブイユシ）の信仰に支えられている。

行方不明になつた夫を、昼は海の見える岩の上（無蔵水）で、夜は洞窟（西籠  
屋）で寝泊りして、いつ帰るとも知らない夫を待ちながら

「里があかかず羽ぬ御衣すらんともて  
今日の佳かる日にかしよかけら」

歌意一わが愛する夫のために立派な御衣をつくろうと思つて、今日の佳い日に  
カシをかけよう。

「わが手引しちやるななゆみとはてん  
里があかかず羽ぬ御衣ゆしら」

歌意一自分の手で（チーバタ）何回も何回もくりかえしてわが愛する夫のため  
に立派な御衣をつくろう。

と歌を詠んで岩上で流れ落ちる真水を利用して、心の中で夫の無事を祈りつつ  
チーバタ（織機を使うのではなく、手と両足を使つて織るという方法）で御衣  
をつくつているのである。待ち焦れている妻が御衣をつくるということは、生死  
不明のまた遠隔の地にいるであろう、夫の靈魂（マブイ）を御衣をつくり、そ  
れを媒介物として招き寄せるといふ信仰に基づくものである。

「マブイ」とは、民俗学辞典（P. 544）によると「沖繩で人体に宿つている靈  
魂、マブリ・マブヤーともいう。死者に死マブイ、生者に生マブイがあり、とも  
に人畜に危害を加えることはない。マブイは時たま遊離する事がある。」と述  
べてあり、日本において、特に奈良時代以降の作品にも、生靈（いきりよう）  
・死靈（しりよう）と称して、靈魂は肉体から遊離して活動するものと信じら  
れ、源氏物語・十訓抄・源平盛衰記などにも多く見られ、「生靈・死靈軽から  
ず、おどろおどろしくぞ聞えける」と記されている。「マブイ」は遊離するも  
ので、沖繩では、「マブイグミ」という行事もあり、さらに「マブイユシ」と  
云つて生マブイでも死マブイでも、ある物（例えば御衣・手サジ・写真とか）  
を媒介して「マブイ」を招き寄せることが出来、又マブイがその物に宿つてい  
るという考え方に根強く支配されているのである。沖繩の人々のみに限らず、  
日本の古代人の生活の中にも見受けられる。例えば

九月十日  
去年今夜侍清涼  
秋思詩篇独断腸

菅原道真  
去年の今夜清涼に待す  
秋思の詩篇独り腸を断つ

恩賜御衣今在此  
捧持毎日拝餘香

恩賜の御衣今ここにあり  
捧持して毎日餘香を拝す。

これは最も有名な詩で、大宰府流謫以後の作でその率直な真情流露が人を打つものがあるといわれているが、第三句と第四句から「マブイユシ」の考え方が強く感じられ、また源氏物語（帚木の巻）に、

「心やましきままに思ひ侍りしに、着るべき物、常よりも、心留めたる色あひ、しごまいとあらまほしくして、さすがに、われ見捨ててむ後をさへなむ、思ひやり、後見たりし。」

平安時代は、一夫多妻の夫婦別居の婚制であり、夫は通うもの妻は家で待つものとされ、たとえ夫は来なくても、着るべき物などきちんと整えながら夫の来るのを待つた時代であり、限りない夫への思慕と「マブイユシ」の信仰を心の支えとして、家を守っていたのである。沖繩の女性（日本の女性も含む）が、貞操観念が強く忍従の精神に富んでいる貞節な女性と賞される原因の一因として、生霊（生マブイ）・死霊（死マブイ）は御衣とか手サジとか（近代では特に写真）には宿るものと信じ、またそれらを媒介して招き寄せることができ、自分を守護してくれるという信仰によつて支えられてきたからでもある。田名区の古老は、御衣は肉体を包み、さらに肉体に宿る靈魂（マブイ）を包み隠くすものであり、漁撈や旅立ちの場合は、必ずしも御衣とは限らないが、愛用の身廻りの品を大事に取扱い保管するということであり、写真に対する感覚も現代の感覚と違い撮らしてくれなかつた。現在われわれの日常生活の中に意識されないけれども、無意識のうちに浸透していつていると、「靈魂寄せ」（マブイユシ）について新垣平徳氏（81才）は語られた。

以上の5つの事項についてのみ論述してきたが、

「天美子の御神天降りみしやうち

つくる島ぐにや世世にさかる」

と長伊平屋節にあるが、この歌のとおり伊平屋島を採訪し、風光の未だ塵埃に汚されない聖地ともいうべき処が島の周辺及び島内の山間にあり、日々の生活に何かたよらずにはいられなかつた積年の経験から今なお神を信ずることまことに厚く、島びとは生来純真であり、魂をゆり動かすだけの神秘性がひそみ沖繩の古い姿を残している島であると痛感せずにはいられない。いま私の採訪せし記録より鈔出し論じてあるが、伊平屋島の民俗調査もごく一部であり完全とはいえない初歩の段階であり、さらに深く研究を進めて行かなければならないと思つている。

猶「念仏歌謡」に関する研究調査については、本誌次号（第四巻1.2号）に発表するつもりである。

**資 料**

伊平屋村誌	伊平屋村役所発行
国学院雑誌	特輯 民俗学一研究の問題点 昭和33年1月 発行
民俗学辞典	東京堂 発行
年中行事辞典	東京堂 発行